

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書
論 文 題 目

多様な日本語教育実践者に必要なこととは何か
—地域の日本語交流活動に参加する母語話者の学びから考える—

川野 さちよ

2015年9月

第1章 問題意識と研究目的

本章では、筆者の問題意識となったベトナムでの経験を通し、問題の所在を述べた。

筆者がベトナム社会でベトナム語を使い生活する中でわかったことは、ベトナムで出逢う全ての人が筆者のベトナム語学習に影響を与えていることであった。また同じように、学生が筆者以外の日本人との出会いから多くを学んでいることも知ることができた。私たちは教室の中で教師から言葉を学ぶだけではなく、社会で出逢う人々との出会いから言葉を学んでいる。そのことを私自身が身を持って知る経験となった。これらの経験は、過去の日本語教師の経験を振り返る機会となり、「日本語教育とは何だろうか、どこで行われるのだろうか、日本語教育において教育をする人、学ぶ人とは誰なのだろうか、そして、私は何ができるのだろうか。」という様々な問いが生まれた。

以上のことより、日本語教育において、学ぶ場、学ぶ対象がすべて限定され、固定化されていることが問題であると筆者は考えた。日本語教育における学びの対象を問い直すことは日本国内外に関わらず共通の問題であるはずだ。

教師と学生で構成される日本語教室という場に限らず、また、非母語話者と母語話者、教師と学生に関わらず、多様な背景をもつ人々が集まる日本語交流の場は、互いの学びに影響を与えあっているはずだ。日本語による学びを育む日本語教育を実践する人は、教師と学習者だけではなく、日本語でやりとりをする全ての人だと筆者は考える。では、その日本語教育実践者が日本語教育を実践するために必要なこととは何だろうか。社会に開かれた交流の場において、多様な人々と日本語を介することで得た母語話者の学びとその背景を明らかにすることで、日本語教育における学びの対象が問い直され、日本語教育実践者には何が必要かを導くことができると考えた。そこで本研究の目的とリサーチクエスチョンを以下のように設定した。

【研究目的】

地域の日本語交流活動に継続的に参加する母語話者が活動に関わる他者とのやりとりを通して得た学びと、その学びが生まれた背景を明らかにする。そして、日本語教育の学びの対象を捉え直し、多様な日本語教育実践者に必要なことを提言することを本研究の目的とする。

RQ1 : Oさんの活動への関わり方はどのように変容したのか。

RQ2 : Oさんの活動への関わり方の変容に影響を与えたものは何か。

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

多文化共生社会における日本語教育の対象は、非母語話者と母語話者であり、双方が対等な関係で学び合うことが重要であることを木村・門倉(2010) 尾崎(2001)等から述べた。次に、地域日本語教育を概観し、日本語で交流を行う活動の意義と、対等な関係で学ぶ場を更に広く地域の国際交流の場にも視線を向ける必要性について(野山 2002)で述べた。その一方で、活動に参加している母語話者の学びがどのような影響を受け起こったのか、その過程が明らかになっていないという課題について(新居 2008)述べた。

母語話者の学びの過程に焦点をあて、学びにどのような活動と他者が学びに影響を与えたのか。そして、母語話者の学ぶ場を広く、また時を長くした中で得られた学びが明らかになっていないという問題がある。日本語教育において、学びの対象を捉え直すため、他者の視点から、学びを捉えるのではなく、学びの当事者となる母語話者の声から明らかにする必要があることを述べた。

以上を踏まえ、本研究は、「多様な人々で構成される地域の日本語交流活動において、多様な日本語使用者と日本語を介して得た学びを知ることで、日本語教育において、日本語を使用する全ての人が共に学びあうことの可能性」を示す研究であると位置づける。

第3章 研究方法

第3章では、研究方法と調査の概要について述べた。調査協力者の背景と研究倫理を述べ、調査協力者が参加した国際交流活動について述べた。調査協力者は過去に都内2つの区の国際交流協会への参加経験があり、現在は都内1つの区の国際交流協会が主催、運営する国際交流サロンや国際交流のイベントに継続して参加している。

データ収集は、「過去に参加または現在参加している日本語交流活動の経験について」「参加するきっかけ」「参加する理由」といった質問項目のみを用意し、そこからOさんの話したいことに応じて自由に展開する半構造化インタビューを計4回行った。インタビューの総合計時間は7時間17分である。

データ分析は、インタビュー4回分の文字化資料とメールを分析データとし、佐藤(2008)の定性的コーディングを参考に分析を行った。そして、分析の観点を佐藤(2000)と山西(2013)学びの定義を参考にし、調査協力者が「どのような経験から、何を得て、行動または行動の可能性に変容をもたらしたのか」という観点で分析した。

第4章 分析結果

本章では、過去に通っていたA区とB区の交流活動と現在も参加を続けているC区の交流活動と大きく2つに分けて述べた。

過去のA区とB区の活動において、【固定的な規則・方法・役割に縛られた活動】【参加の仕方の制限】を経験したOさんは、【教えるよりも一緒にやる】【相手に合わせた活動の目的を考える】という関わり方を見出していった。そして、他の参加者の相手の状況を考慮せず一方的に教えるという関わり方が【参加者の減少】を招いているという状況を経験したことで、それとは異なる自身の関わり方に意味や自信を感じ、その必要性を確信するようになっていた。つまり【参加者の減少】を経験する事もOさんの関わり方に影響を与えていることが読み取れた。

また、【教えるよりも一緒にやる】【相手に合わせた活動の目的を考える】という関わり方によって、外国人参加者と思わぬつながりを築いていたことに気付いたOさんは、A区の実験も交え、そのような日本語交流活動の場を自身の「存在証明」となる場であると認識していた。したがって、【交流活動で得られたつながり】もOさんの関わり方に影響していることが分かった。

A区とB区の活動を終え、現在参加をしているC区の活動では、Oさんは活動内も含め、現代の日本社会の【希薄な人間関係】を捉え、C区の活動で【排除される参加者の存在を認識する】経験を得た。その経験を通して、Oさんは活動の参加者に目を配るという【活動全体を見る目】を持ち、そして、活動中だけでなく、活動後も【有機的な繋がり】と参加者間の結びつきを深める【言葉の伝え方を工夫する】という現在の活動における関わり方を、過去の経験の振り返りから、見出した。

また、その関わり方を見出す過程には、外国人の日本語の使い方を知ることで、異なる視点から日本語を見る機会や予備校時代の尊敬する先生との出会いといった交流活動前の経験も影響していたことがわかった。

第5章 考察

分析結果から考察を行った結果、リサーチクエスチョンへの答えは以下の通りである。

RQ1 : Oさんの活動への関わり方はどのように変容したのか。

一部の参加者を受容することから全ての参加者を受容することへと変化し、それに伴い、活動のあり方が変わり、全ての参加者と活動へ働きかける関わり方へと変容した。

RQ2 : Oさんの関わり方の変容に影響を与えたものは何か。

多様な参加者と深く繋がる活動を考え続け、実践する過程そのものであった。

そして、以上のリサーチクエスチョンから明らかになった母語話者の学びとは、多様な参加者と共にどんな活動をつくりたいのかという問いと参加者と活動に自分がどのように関わっていけるかという問いを同時に問い続けていく過程であった。

以上のことから、日本語教育における学びの対象は日本語を使い、コミュニケーションを図る人たち全てであり、日本語を使用する全ての人々が日本語教育に関わるメンバーであり、学ぶ人であり、また他者に学びを与えられる人である。ゆえに、日本語を使用する全ての人々は、日本語教育の実践者である。母語話者と非母語話者、教師と学習者のカテゴリーにとらわれず、全ての人々が、日本語を介し、他者から影響を受け、学び合っているのだ。そして、日本語教育実践者は皆一人ひとりが個々の文化背景・思考を持つ。つまり日本語教育実践者一人ひとりが多様なのである。一人ひとりが多様であることを知り、他者の異なりを受け止め、多様な学びが連鎖し、学びが更に広がりを見せる。

そして、多様な日本語教育実践者に必要なこととは、他者との言葉のやりとり全てが自己の学びも他者の学びも育むという視点をもつことである。そして、自己を他者に、教室や活動を社会に開き、多くの「異なり」と粘り強く、言葉で対話し、社会の中で、自分がしたいことを更新しつづけていくことであると提言する。

第6章 結論

地域の日本語交流活動に継続的に参加する母語話者が活動に関わる他者との日本語のやりとりを通して得た学びとは、多様な参加者と共にどんな活動や参加者との関係性をつく

りたいのかという問いと活動とその参加者の関係性を実現するために、自分自身がどのように関わっていきかという問いを問い続けていく過程であった。そして、日本語教育の学びの対象は日本語を使い、コミュニケーションを図る者全てであり、日本語教育を実践する人である。一人ひとりが他者の学びを生み育むのだ。

そして、多様な日本語教育実践者に必要なこととは、他者との言葉のやりとり全てが自己の学びも他者の学びも育むという視点をもつことである。そして、自己を他者に、教室や活動を社会に開き、多くの「異なり」と粘り強く、言葉で対話し、社会の中で、自分自身がしたいことを更新しつづけていくことであると提言する。

今後の課題としては、筆者が日本語交流活動を設計・運営・実践するものとして地域の日本語交流活動の場において実践研究していく必要があることを述べた。

【参考文献】

- 新居知可子(2008)「母語話者と非母語話者の固定的役割を超える日本語支援活動を目指してー「2007 春 にほんご わせだの森」に参加した日本語母語話者へのインタビューからー」『早稲田日本語教育学』第2号 早稲田大学日本語教育センター pp.45-58
- 尾崎明人(2001)「日本語教育は誰のものか」『日本語教育学を学ぶ人へ』世界思想社 pp.3-13
- 木村哲也・門倉正美(2010)「日本人と日本社会に対する日本語教育の貢献」『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』日本語教育政策マスタープラン研究会 ココ出版 pp.97-118
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法 ー原理・方法・実践ー』新曜社
- 佐藤学(2000)『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット No.524 岩波書店
- 山西優二(2013)「多文化社会にみる学びづくりのコーディネーター「公」「共」「私」にみる学びの文化の多様性に着眼してー」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究 17 多文化共生政策の実施者に求められる役割ー多文化社会コーディネーターの必要性とあり方ー』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター pp.36-45